

柿 かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお  
 かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお  
 かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお  
 かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお

# 柿 生 文 化

平成 21 年 4 月 20 日  
 川崎市立柿生中学校  
 郷土史料館情報・研究誌  
 第 9 号

## 今、二宮尊徳のわけ

小田原が生んだ偉人  
 柿生にも影響か

校長 板倉 敏郎

先日、神奈川新聞に特集で大々的に二宮尊徳が取り上げられていました。また、「日経ビジネス」などの経済誌にも特集が組まれていました。一方、お隣の中華人民共和国では北京大学などが中心となって本格的に二宮尊徳研究がすすめられ、最近ではかなり脚光を浴びているようです。この話を聞かれた方の中には、何で今頃「二宮尊徳なの？」と疑問に感じる人もいるかも知れません。昔は、一般的には「二宮金次郎」という名前で親しまれていました。背中に薪を背負い本を読みながら歩く少年の像は、大概の小学校にはあったようです。戦前の柿生小学校の正門近くにもありました。ちょうど現在の柿生中学校の通学路となっている「思い出の丘」付近にあったようです。



二宮尊徳

この少年は、天明 7 年 (1787 年) 小田原近郊の小田急線の栢山 (かやま) 駅から 15 分ほど歩いた辺りの村の比較的豊かな農家の長男として生まれました。遠くに富士山の白い頭頂部が望まれ、近くには酒匂川が流れています。金次郎少年は、13 才で父と、15 才で母と

死別します。度重なる酒匂川 (さかづか) の氾濫で田畑も流されてしまい家は、没落してしまいます。やがて兄弟とも別れ、親戚の家に預けられますが努力の甲斐あって 24 才で自分の家を再興させます。やがて、才能が認められ、大名や旗本 (江戸幕府の直轄の家) 等の財政を再建させ農村の復興にも力を注ぎ約 620 もの村や町を救いました。

尊徳の考えは、すべての物や人には生まれながらに備わる良さや取り柄があるというものです。それを「徳」と名付けました。今日まで祖先は、その徳を生かし、人々に住みよい生活を提供してくれました。例えば、現在の私たちの生活を考えてみてください。スイッチひとつで電灯がともされ、蛇口をひねれば水もお湯もでてきます。冷蔵庫、洗濯機、電子レンジ等などは皆私たちの祖先の「徳」によるものです。

このように私たちは、「徳」によって生かされているのですから今度は、感謝の気持ちを持ちながら自分の「徳」を磨き、それを生かして社会に役立てていきたいと思います。この考え方が二宮尊徳の考えです。尊徳の考え方は中国の古典である「論語」「大学」(儒学の本で人間の正しい生き方や思いやり等について書かれている) から大きな影響を受けたといわれています。

今、経済が急速に発展している中国で二宮尊徳に対する研究が進み、ブームとなっているのも、その背景に経済が「金儲け主義」に陥って、色々な問題が起きているという現実があるからでしょう。その中に「感謝」や「優しさ・思いやり」の心があってこそ「人のためになる経済」となるわけです。今、世界的にみられる不景気の原因は、その辺にあるのではないかと思います。今回は、二宮尊徳の考えがこの柿生にも大きく影響していたというお話をさせていただきます。

身近な史料を使用した効果

～江戸から明治と大きな社会の変革を、柿生の先人の気持ちから考える～

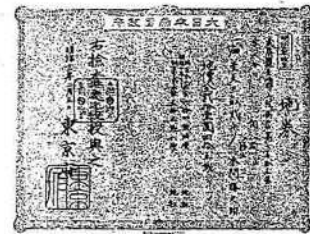
柿生中学校 黒川 保之

1867年土佐の前藩主山内豊信のすすめで 15 代将軍徳川慶喜は政権を天皇に返上しました。朝廷は王政復古の号令を宣言し、以後さまざまな政治改革が行われるようになりました。いわゆる明治維新です。余計なことですがこの中心人物の一人である徳川慶喜を、NHKの大河ドラマ「篤姫」では、やや強引で策士に描いてありましたが「新撰組」では度胸のない臆病者に描かれていました。歴史は評価者によって描かれ方が異なるものだと思います。

さて、教師が授業研究をする際には学習指導案というものを作成し、多くの人に授業を見てもらい研究を進めて行きます。いわゆる進行表なのですが、今回史料館の史料を使用して行う授業用に明治維新の学習指導案の素案を作ってみました。とはいっても実際に本物の地券を見て当時の税制の変革を知るというよくあるものに近いものです。明治政府の政策である地租改正は 1873 年に明治政府の財政を安定させるために、土地の所有者に地券 (史料 1) を発行したことに始まります。その上で地価の 3% を地租として土地所有者に現金で納めさせたものであります。



1874年 地券 (史料1)



1879年 地券 (史料2)

生徒は本物の地券を実際に手に取り、若干の汚れの中に 130 年余の重さを感じてくれるものと思います。次に 1879 年発行の地券を提示します。今回も実際に触れてみて同じ地券でも紙の質がやや異なることに気づきます。その文面はやや難解な文字と、見慣れない書式であり最初は手こずることでしょう。江戸時代での農民の負担は五公五民または四公六民 (収穫高の 50~40% を年貢としておさめていた) であり、3% という数字はかなり軽減されたものと感じると思います。当時の人々もそう感じ新政府の政治に期待をしていたことでしょう。だが明治政府は江戸時代と歳入が変わらないように計算したものが 3% であり、多くの人々の生活は向上するどころか身分や立場によってはかえって苦しいものになってしまったようです。期待を裏切られた人々は新政府に対する反感を強め、徴兵令に対する反対も加わり政府に対して声を上げます。その結果 1879 年発行の地券 (史料 2) にある 2.5% に地租が軽減されました。

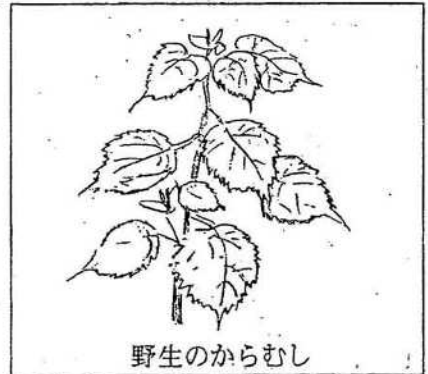
史料館はできるだけ地元の資料を扱おうとしています。今回生徒に提示するものが実際にわたしたちの地域のもので知っている場所のものであったら、当時の人々の生活や苦勞を身近に感じる事ができことを期待しています。教科書に載っている出来事としてではなく、我々の祖先が実際にこの地で生きていたことを実感させた授業をしたいものです。その上で生徒一人ひとりが明治維新を捕らえ評価することができ、自分の考え・立場を表現することができたら社会科の教科としての目標に近づくことと考えます。

(史料の寄贈・寄託のお願い) この授業提案に関して以下のものにご協力を  
1872年 1877年の地券 江戸期の水帳 (検地帳) 高札 (五榜の掲示)

# 苧麻 (からむし) ー麻生の献上ー

郡衛が置かれた頃、農地は口分田といって官地で、人民(百姓)は、租、庸、調の負担(税)を課せられていました。租は、米(穀物)の年貢で、男子は6歳になると稲2束と2把。調は、物品(麻布)の納入で成人ひとり二丈六尺(巾二尺四分)が義務付けられ、庸は、労役で成人は十日間の就役(又は、布二丈六尺)。また、それとは別に郡庁の令で、成人は50戸に二人の割合で兵役(防人)に徴集されることがあったそうです。

麻生の区名の起源となる麻の栽培は、武蔵風土記の「天武天皇の御代(671年)、阿波の国より忌部(いんべ)氏族が都築に渡来、苧麻を栽培、麻布を朝廷に献上した」の記述に始まりますが、この忌部氏の遠祖は、大和の国三輪山の神職との説があり、現町田市三輪町(古代は都築郡麻生郷)の始祖も祭祀を司る氏といわれ、元慶年間(877年)大和国上城郡三輪の里(三輪王朝発祥の地)よりこの地に移住、三輪神社(現楯山神社・熊野神社)を建立、麻を栽培、麻布を武蔵六所神社に献上、麻布を産婦の守りとした伝承がありますので、これらの氏族は祭祀を通しこの地に勢力を張ったものと思われます。



野生のからむし

苧麻に関する記録には天平勝宝7年(755)、万葉集、

東歌に「麻苧<sup>あさお</sup>らを麻笥<sup>まげ</sup>に多<sup>おほ</sup>に續<sup>つ</sup>まずとも 明日着<sup>あした</sup>せさめやいざせ小床<sup>ことこ</sup>に」と農民の妻の歌があり、「麻糸を桶いっぱい紡んでも、明日に着るのでないから早く寝ましょう」で当時、多くの苧麻を生産していた事を窺い知ることができます。また、この頃、都築の防人として筑紫へ旅立った「服部於田」の服部の遠祖は、織物を職とする氏族であったとされています。

苧麻(からむし)は、イラクサ科の宿根性多年草で今でも道端に見ることができますが、手を加え栽培すると茎は2~3メートルに伸びるといい、その繊維は強健で茎を水に浸け、皮を剥ぎ、繊維を採り出し糸に紡ぎます。回転で撚りを掛ける小道具を

紡錘車と呼びますが、この紡錘車(円盤状)は、鶴見川流域遺跡の数箇所から発見され、岡上の丸山遺跡からは3個も発見されています。

それにしても、当時3~4メートル四方の竪穴住居の農民に二丈六尺(77メートル)の布が織れたのでしょうか。どう考えても無理があります。郡庁が貢物の量を定め、農民に麻糸を献じさせ、郡庁や特権者が織機を持ち、その益を搾取していたのではないのでしょうか。口分田で私有地を持ってぬ農民、そして防人の就役。「麻苧らを・・・」万葉集にある



掘立て式と竪穴式住居

る私たちの祖先の生活が哀れにさえ思えてまいります。

(参考 川崎市史、ふるさと三輪)

文、小島一也氏



— 英字新聞「ファーイースト誌」がとらえた日本の姿 — NO2

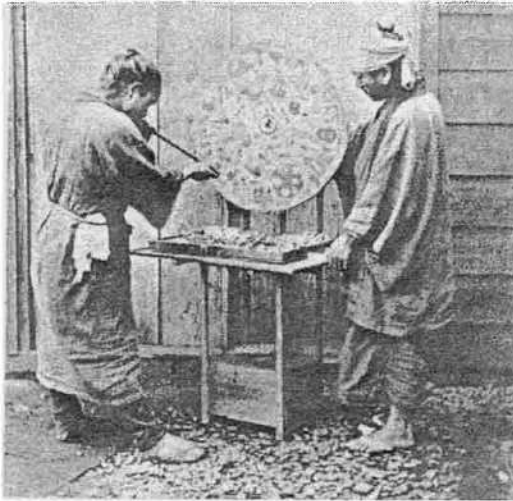
## 幕末期の写真から拾う人々の生活

明治3年外国人居留地の横浜では発行者不明の英字新聞「ファーイースト」(極東)が極秘で印刷出版されました。

この新聞には、幕末から明治初期の日本人の姿が克明に写真として撮影されておりその多くが幕末期に撮影され収集したものと考えられています。

この新聞は、明治11年12月まで発行され、写真の数は約1000枚にも及び、遠く中国や欧米諸国に伝えられました。

写真の技術は、1839年フランスのダゲールが現在のカメラの原型を作り上げました。わが国には、それから2年後の天保12年(1841年)に伝えられました。



(あてものや)

左の写真は、祭か縁日の様子でしょうか、手ぬぐいをかぶった香具師(やし)が盤をくるくる廻します。回る盤の的に吹き矢を的中させれば盤の下に並んでいる籠甲飴(べっこうあめ)などの駄菓子があたるしかけで1等から7等くらいまであって景品の大小が違うようです。

現在でも縁日などに行くとこのようなあてものやが店を出しています。祭りや縁日の様子は、今も江戸時代あまり変わりありませんね。

### 郷土史料館「史料」の寄贈・寄託のお願い

22年に完成する本校の「郷土史料館」に収蔵する柿生・岡上に関する歴史的資料を探しています。ご自宅で保存されている史料(古文書や生活道具類)でお譲りいただけるものや、一時、お貸しいただけるものがございましたらお知らせください。しっかりとした管理体制で収蔵します。よろしく願いいたします。

**今、地域の史料を探しています!**

**協力してください!**

**このような史料はありませんか**

- ◎江戸時代の「検地帳」・「水帳」・「五人組帳」
- ◎地域の「絵地図」
- ◎江戸時代の「高札」(特に慶応4年の太政官布告「五榜の掲示」)
- ◎江戸時代の寺子屋や私塾で使用した「教科書・往来物」
- ◎明治期発行の「地券」
- ◎明治・大正・昭和(戦前・戦中)の「国定教科書」
- ◎その他各種史料

寄贈・寄託していただく史料がありましたらご一報ください。

柿生中学校 044-988-0004 黒川まで